

何のための読書なのか

東海学院大学 教授 アンドリュー・デュアー

本を読むと、何かいいことがありますか？

読むことはためになる、とよく言われますが、本当にそうなんですか？

読書の恵みというのは実に多様です。いくつかの例を挙げれば、①子どもの語彙が大幅に増える。②言葉と読解力が発達する。③学力が高まる。④想像力と集中力が鍛えられる。⑤性格が人の気持ちを考えるように形成される。⑥感情や感性が発達する。⑦社会性が発達する。⑧人の気持ちが読める共感が成熟する。⑨文脈理解力が鍛えられる。⑩経験の拡張ができる。⑪悩みを解消する力が身につく。⑫進路のヒントが得られる。⑬親などとの絆が深まる。⑭時間を楽しく過ごせる、などがあります。

語彙と表現力を増やすには、読書が極めて効果的です。とくに、子どものころの読書は言葉の発達に非常に重要です。日常会話やテレビで出会う単語と表現はかなり限られていますが、本を読むとその幅が飛躍的に増えます。学校では読むことが学習の基礎となっているので、就学する前に語彙を増やさないと、必要な学びの土台ができないまま、後れが生じてしまいます。

また、物語をたくさん読む人は登場する人の身になって、様々な感情を疑似的に経験し、人の心の作用をよく理解できるようになります。自分の生活で体験できないことを、本を通して体験できます。それは、疑似体験であっても、脳の処理の中で本物の体験と実質的にあまり変わらないからです。人情、感性、感受性、社会性、協調性、人の動機と気持ちを読み取る力などは、体験の種類と数で高まるのであれば、読書は近道になります。

最近、若い人はモノを買うよりも、体験を買いたがるのは、モノはいずれなくなるが、感動や体験の記憶は一生残るからだといいます。読書を通して、より多くの冒険や旅などができます。読書は疑似体験であっても、想像力を使った分、感動の記憶は本物に勝るとも劣らないものです。

しかし、テレビやスマホなどに夢中な子どもたちを放っておけない状況になりつつあるなか、本を読む子どもをどうやって育てますか？まず、本のある環境を作ることから始めます。子どもたちが本に興味を持つには、大人のよい見本が必要です。本のない家では、子どもが読書をしたくてもできません。本を読まない親に「読みなさい」といわれても、説得力があまりありません。自分の楽しく読んでいる姿を子どもに見せることが最も効果的でしょう。

小さい子どもは素直に本が好きだが、高学年や中学生になると友達に見せる姿が気になるので、読むことが格好いいと思わなければ、しないかもしれません。しかし、友達が楽しくやっていることにひかれる心理を活かせば、読書を流行させることができるはずです。子ども同士で読書の楽しさを伝え合える環境を作りましょう。

家や図書館で過ごした読書の時間は一生の財産になると思います。授業とか、会社の会議

とか、毎日の生活で、「あ、それは分かる。図書館で読んだことがある」という日が来るに  
違いありません。

さて、読書のよさがこんなにあるなら、みんなを誘って、読んでみよう！